

# 和歌を歌う からころも



**公演日時** 平成21年11月24日(火)  
**18:00開場** **18:30開演** **20:15終演**  
**会場** 紀尾井小ホール

**第一部 「伊勢物語」第九段より 「からころも」**  
業平東下りの情景と和歌披講 出演 星と森披講学習会会員

からころも 着つつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ  
名にし負はば いざ言問はむ 都鳥 わが思ふ人は ありやなしやと 他

**第二部 対談 披講会坊城会長をお迎えして**

坊城俊周  
中島宝城  
伊藤一夫

宮中歌会始披講会 会長  
歌人、宮内庁歌会始委員会参与  
星と森披講学習会 主宰

**第三部 「をんなうた、をとこうた」**

古歌より近代の歌まで、女流、男声、混声披講にて 出演 星と森披講学習会会員

難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今は春べと 咲くやこの花(「古今集」)  
琴の音に 峰の松風 通ふらし いづれの緒より しらべそめけん(斎宮女御)  
白鳥は 哀しからずや 空の青 海のおをにも 染まずただよふ(若山牧水)  
やはらかに 柳あをめる 北上の 岸辺目に見ゆ 泣けとごとくに(石川啄木) 他

チケット 前売 4,000円 当日 4,500円  
発売 10月1日より、下記ホームページから申し込みできます。  
アドレス <http://www.2u.biglobe.ne.jp/~BDN/postmail/ticket.html>

今公演、第一部の主人公である在原業平は、光源氏とはまた別の意味で、恋に命をかける日本人男性のひとつの生き方を表しています。最近ではゴシップはともかくとして、男性の真剣な恋の物語りを聞くことが少なくなりました。こうした恋愛力の衰えは、社会から芸術性や文化性が奪われているひとつの現われとも見えます。仕事人間に化した日本人男性には、今や恋や文化を語らう力が失われつつあるのでしょうか。今夜は業平の命がけの恋を通して、もう一度、男女が真剣に愛に悩み、喜び、悲しんだときを思い出し、そこから生じるところの究極の魂の活動がもたらす言葉の力、歌の力を実感していただけたら幸いです。また第三部では、私どもの活動の特徴でもある、女流披講をたっぷりお聞きかせたいと思います。

### 「蘇れ、美しき和の歌、力ある声の歌」 歌人 中島 宝城

太古の昔から、山川草木、鳥獣虫魚、生きとし生けるものと共に鳴いていたヒトは、やがて歌を歌うようになりました。その歌から「声の言葉」がうまれてきました。そして言葉は、歌によって育てられ鍛えられ磨かれてゆきました。次には文字が創られ、時間、空間を超える有力な情報伝達的手段となりました。しかし、「文字の言葉」では伝えることのできないものもありました。

日本では和歌をもっぱら「短歌」と呼ぶようになった頃から、しだいに歌を歌うことをしなくなり、歌よみの多くが歌うことを前提としない歌を文字で作るようになってきました。言葉の調べや声の響きを軽視した歌は、自然に、人の心を動かす美しさや力を失ってゆきました。これは生きものの息吹である声を失った歌の行き着くところでもありました。

和歌は、発生の原初から、声に出して歌われてきた「歌」であります。今また「和歌を歌う」ことから始めて、歌を美しく力ある歌にしましょう。

### 和歌を歌うには 東京成徳大学教授 青柳隆志

和歌はもとより「ウタ」であり、本来は歌われるものであったことは言うまでもありません。しかし、おおらかな古代歌謡の時代から、和歌が徐々に洗練された文芸へと変化してゆく過程において、和歌は高らかに「ウタ」われるものから、しずかに吟じられ、その歌詞を味わうという形をとるようになりました。平安時代以降、こうした歌い方がととのえられ、現在、「宮中歌会始」で行われているような形に収斂してゆきました。このような伝統的な和歌の披露の仕方を「披講」と呼び、由緒あるものとして今に伝えられています。

### 会場のご案内 紀尾井小ホール

東京都千代田区紀尾井町 6 番 5 号 03-5276-4500

<http://www.kioi-hall.or.jp/>



### 最寄駅

四ツ谷駅 麴町口 徒歩6分  
 麴町駅 2番出口 徒歩8分  
 赤坂見附駅 D出口 徒歩8分  
 永田町駅 7番出口 徒歩8分